

第八話<今回の“U”は八頭身でなきや駄目なんだ>

“U”の衣装は以前もデパートのショーで着けたことがあったが、撮影用はそれとは異なった。わたしの骨格から採ったマスクはわたしの顔とぴたりと一つになる。しかし…目の下ののぞき穴はカメラにばれないよう極端に小さくできていて、しかも隠れたスイッチで目に光が入ると視界は無いに等しくなるのだ。その状態で怪獣との立ち回りを演じたら怪獣がどこに行ったかも、自分がどこを見ているのかも分からなくなる。怪獣はそのことを心得て動かないととても見ていられる絵にはならない。さらに、その呼吸のできない辛さは、試着した段階で少し動いただけでも息が上がったほどである。

そしていよいよクランクインも一ヶ月に迫り、特撮監督のTさんの前でスーツを着けた“U”がポーズをとった。

監督は始めから腕を組んで、椅子の背に体をのけぞらせ渋い表情であったように思い出す。

「んー、……駄目だな。足が短いよ。今回の“U”は黒人のように8頭身でなきや駄目なんだよ！足が短かいんだよ…」 監督のこの一言で 6.5 頭身のわたしは降板し代わりに日本人離れした A 氏が抜擢されたのである。

その後、怪獣のオーディションがあり、わたしは選ばれました。そのとき来ていたほかの事務所の人から、「おめでとうよかったね！頑張ってください！」と手を取られて思わずむっとした。

「くっそー！“U”に負けない怪獣になつたる！！」